

【提出用】 事業報告書

1. 市民協業のためのゲーム開発

- ①時期：2022年9月
- ②場所：東京都港区
- ③参加者：28人 (実施人数)
- ④内容：社会課題の当事者の立場を想像するための演劇ツールキットの開発・ワークショップでの実施およびコモンス化を行う。詳細は以下。

不妊治療や特別養子縁組、それに閉じない「産む・育てる」を特定のテーマとして設定し、当事者や医療関係者などの様々なステークホルダーに対してのヒアリングやデスクリサーチを行う。そのリサーチで得られた知見や洞察から、不妊治療などの社会課題当事者だけではなくこれから産むことや育てることについて考え始める人々を対象に、産むことをめぐる状況を想像し、違和感や実感を共有し、対話を通じて社会課題に対しての可能性をひろげていくためのツールキットを開発。

おもなアプローチとして即興演劇(インプロビゼーション)を採用した。即興演劇とは、創造性教育やイノベーションデザインのプロセスにおいても昨今注目を集めている手法でもあり、その場で半強制的にシチュエーションに応じた役を演じてみることで、他者への共感を培い、課題状況のリアルな想像を促すことを可能にする手法である。

今回は、リサーチから特定のシチュエーションと配役を抽出して、台本に仕立てることで、演劇をワークショップ形式でカジュアルにできるようなツールを開発した。これによって、普段語ることの難しいテーマに対しての市民対話のハードルを下げられる。ここから得られる対話の内容自体が、不妊治療や子育てなどの多岐にわたる課題に対するインスピレーションになった。

ツールはPDFにして、誰でもサイト上でダウンロードして自身で活用できるオープンアクセスなものに。学校、職場、共創ワークショップなどさまざまな場面での活用可能性が考えられる。



2. 市民の多様性を表現する作品の検討会・制作

- ①時期：2022年4月～2022年11月（WS計4回）
- ②場所：東京都渋谷区, 東京都港区
- ③参加者：28名 (当事者：4人・アーティスト/クリエイター：7人・特定の住民セグメント17人)
- ④内容：不妊治療や特別養子縁組を包摂した「産む」を特定テーマに、リサーチ・一般公募にて28名の方々と作品を共同制作する対話型プログラムを展開。その後、示社会ビジョンおよびコンセプトの提案作成、またアーティスト5組による作品を制作。

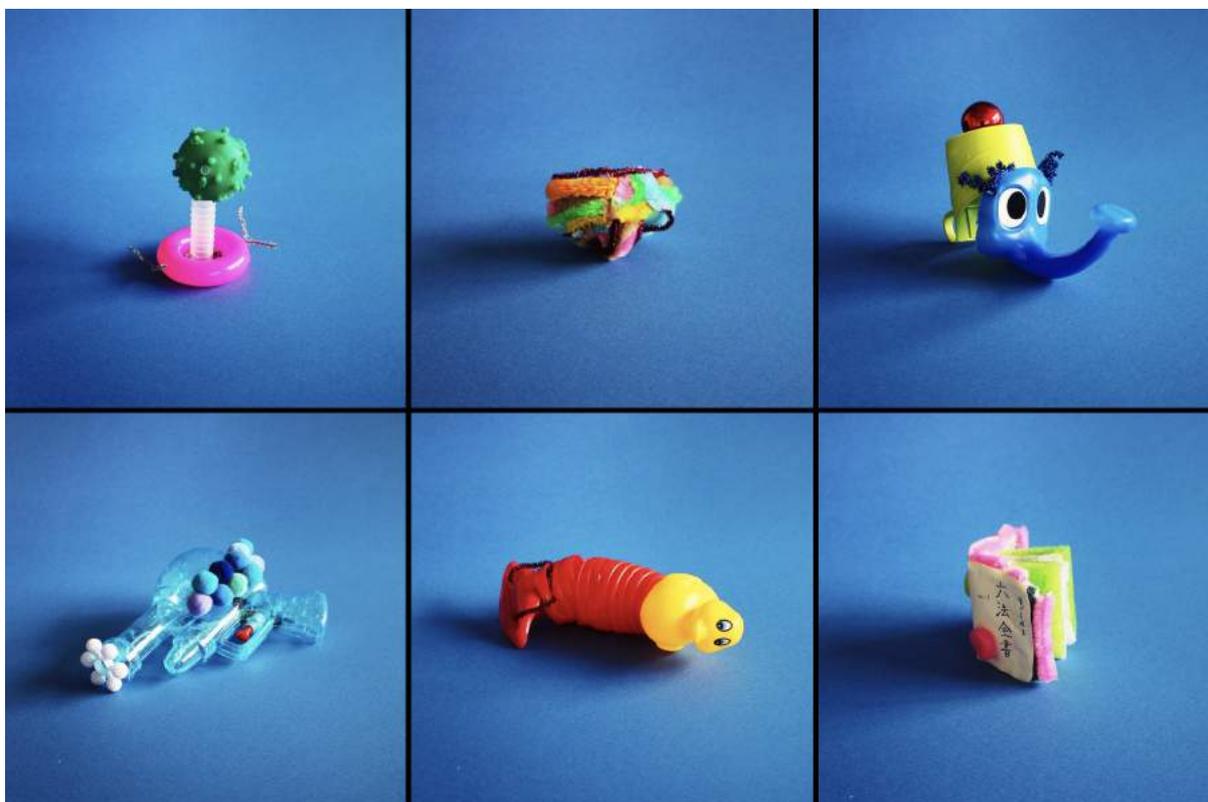
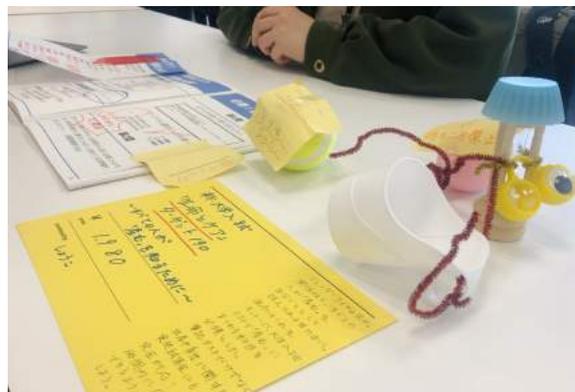
「産むことに対して深く向き合った経験知をもつ」当事者、公募で参加するもやもやを抱えた一般参加者、作品制作を委託したアーティスト/クリエイターの3つのセグメントの参加者から成る、合計4回のワークショップ型プログラムを実施した。

このワークショップ自体、参加者ひとりひとりが自分自身の産むに対する違和感や悩みに向き合いつつ、その悩みが社会に存在する当たり前のシステムや言説からきていることを見つめ直していく社会化のプロセスを組んだ。

第一回目のワークショップでは、事前準備として「今とむかしの理想の家族像と変遷の理由」をコラージュで表現した。それをもとに、参加者同士で対話をしたり、当事者との座談会をおこなった。第二回目では、不妊治療などのシーンにおける人のやりとりを即興で演じた。演じることで、こころの底の偏見や価値観が現れる。その後、各々のもやもやを粘土で表現し、共有しながら対話した。第三回目では「産む」に対する違和感、社会の当たり前へのもやもやを個々人で深め、向き合いたい「問い」に変換した。極端に考えるために「もしも～だったら？」と架空の世界を考え、最終日に、それらを作品化し、参加者同士での展覧会および振り返りを行なった。

プログラムは全体として、参加者自身の内省や気づきを生み出すことだけでなく、それらをインサイトとして今後展開しうるプロジェクトやコンセプトアイデアを創出するこ

とも狙いだった。プログラム終了後は、制作委託をしていたアーティストは作品を、運営チームはコンセプトアイデアを創出した。



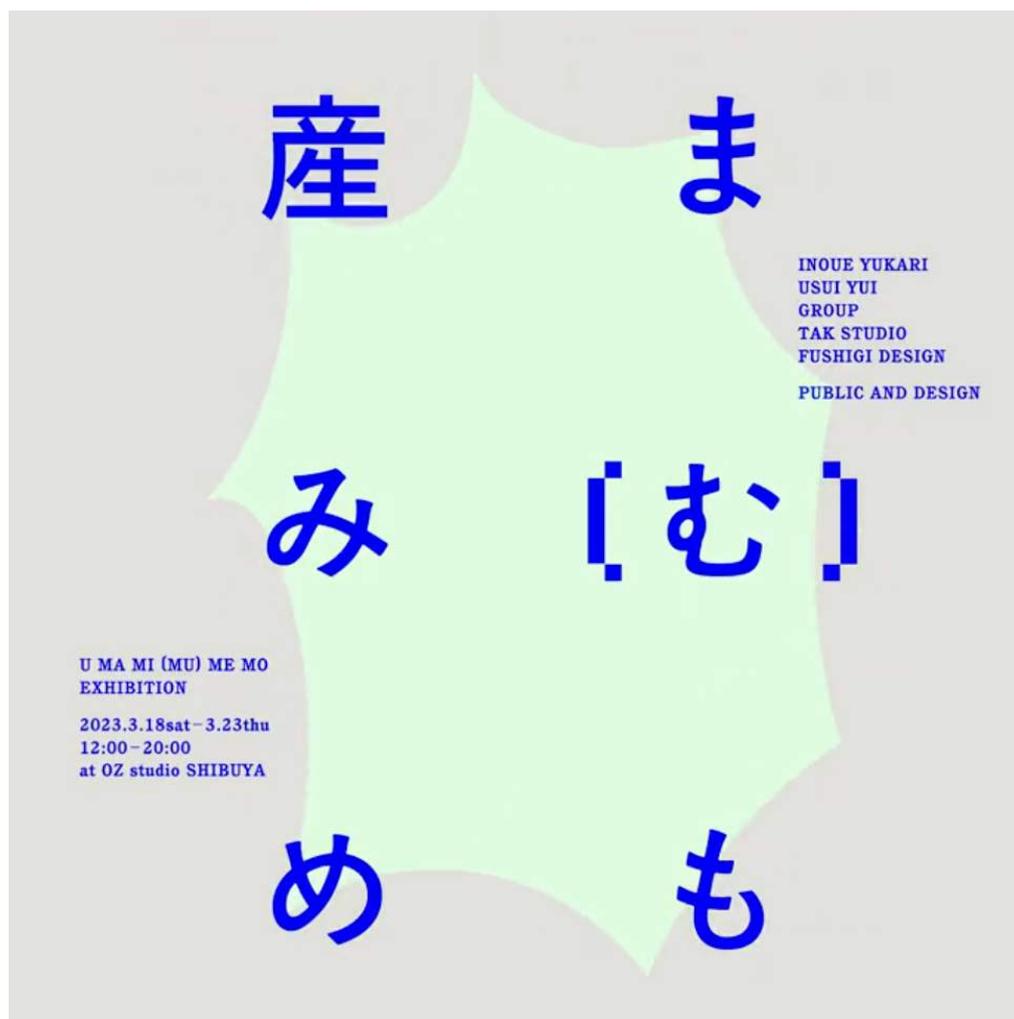
3. 産むの多様性を表現する作品展示

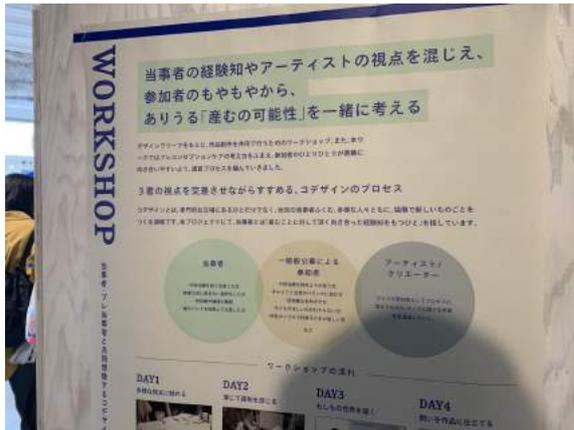
- ①時期：2023年3月18日-23日（6日間）
- ②場所：東京都渋谷区 OZ sutudio Shibuya
- ③参加者：496名（展示来訪者）
- ④内容：事業1.2を通じたプロセス・コンセプト・作品を展示。展示実施前には、参加作家の対談記事や、テーマに関連する専門家を招聘した、オープンなトークセッションを実施。詳細は以下。

参加作家の対談記事は、2本のコンテンツを展示に関連して制作した。デザイナー・秋山慶太、越出つばさと、建築家・齋藤直紀の対談記事および美術家・井上裕加里と美術作家・碓井ゆいの対談記事を制作・発信。

オープンなトークセッションに関しては、「スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー 日本版」共同発起人・井上英之さん、多様な産むにまつわるストーリーを紹介するメディア「UMU」を運営する株式会社ライフサカス代表で、公共とデザイン主宰の「産む」にまつわる価値観を問い直すプロジェクトではアドバイザーを務める西部沙緒里さんをゲストにしたセッション。個人的な悩みと社会課題の仕組みを接続するソーシャルイノベーションのあり方をテーマにして、オンライントークセッションを行い、およそ30名が参加した。

主たる事業としては、『産まみ(む) めも』展と題して、これまで行なってきたプロセスおよびリサーチの成果、ワークショップ・プログラムを経て立案されたコンセプトの提示をアーティストの委託作品とともに渋谷区東のOZ Studioを借りて、6日にわたっての展示を実施。当初想定の200名をはるかに超えた496名の来訪があった。





来訪者の変化

来場者のコメント

- 「産む」も「育てる」も今までの固定観念にとらわれず、多様性に富んだ考え方・制度づくりがこれからの人間社会に必要なと思う。
- 価値観は理解できる一方で、伝統的vs進歩的という分断が起きる現状をどう捉えるべきか考える必要がある気がしています。いかにイデオロギーの分断を超えられるかが重要？
- 分は今のところを産みたいと思っていないけど、パートナーともオープンに話してみたいと思った。「産む」ことに紐づけられがちな女性性や審美性についてももう少し考えてみたい

- リサーチのプロセス・メンタルモデルを見て自分が今どこにいるかとか周りの人がどうかとか想像できて、気持ちが軽くなりました。
- 不妊治療について考えてみたこともなかったが、明るさと暗さの両面がしれて興味深かった。現状についてもっと詳しく友人やパートナーと話して見たいと思った
- 「子育て」に何が入るのか？もっと広げて考えたくなった。「まち」で育てるとは
- 産む親も育ての親も、こどもにとっては大切な親
- 人と話すことを避けていた（おかしい・変だと言われることが怖くて）私にとってこの展示はまた過重負担について考えよう、模索しようとするきっかけになりました。
- 雪の子どもたちの会話は、私が産まない、と決めなければ出会えたかもしれない会話なのかと思ひ、やっぱり寂しさを感じました。（会話がかわいくて、むじゃきで）
- 産んだ子どもをかわいいと思えなかったらどうしようと思ひ踏み出せないでいる

次ステップへの洞察

今回の展示に訪れた多くの方が、こうした展示があってよかった、という感想とともに自身の経験をシェアしてくれた。これだけ、万人に関わるテーマながらも、なかなか自分の内面に深く踏み込むきっかけは少ないし、他者と考え方を共有する機会も少ない。ワークショップおよび展示に関わった人に対しては、そうしたことを分かち合える場になったが、それ以外の人は知らないままである。そのため、次ステップとしての1つの方向性は、このような産むにまつわる複数の可能性を知って話すための機会を公式の活動と繋げて予算化することだ。

また「2.市民参加型リサーチ・コンセプト立案プログラム」を経て創出されたコンセプトは、事業終了後も自治体や研究機関、民間企業と連携した実証実験を検討できる内容であるため、そうした連携の強化と実証実施に向けた動きが考えられる。

事業成果物

展示に向けたプロジェクトのwebサイト

産まみ（む）めも展_産む物語を問い直す展覧会 | 公共とデザイン

公共とデザインによる、産むの物語を問いなおす展覧会『産まみむめも』。本展では、さまざまな当事者との対話と表現を通じた協働制作のプロセスおよび5組の作家による作品をご紹介します。産まない・産みたい・産

[産](https://publicanddesign.studio/umamimumemo) <https://publicanddesign.studio/umamimumemo>



市民協業のためのゲーム | 演劇ツール産magination

産magination - Google Drive

https://drive.google.com/drive/u/0/folders/1_JCcBznGGfu9pot005Y9gWIWJ6m9kwJZ

プロセスのレポート・ドキュメンテーション

【公開用】プロジェクト・レポート

市民の多様性(産むにまつわる多様な物語)を表現する作品群

<https://www.instagram.com/umamimumemo/>